

十九、「茶の実」と「茶飲み」の話

篠栗育ちの年輩の人で、八木山話の一つや二つを聞いたことがないという人は、まずいないでしょう。たとえば、こんな話です。

むかし、殿様が八木山に見回りに来ましたが、むらが貧しいのを見て、みんなを集めて言いました。

「茶の実を植えるがよい。植える時には芽だけは出し
ておけ。あとでまた見にくる」

村の人たちは相談しました。

「チャノミつちや何じやろう？誰か知らんか」

一人が言いました。

「チャノミつちや、お茶ばかり飲んじよるもの
こつちやろう」

殿様が見に来てみると、村いちばんの茶飲みのお
ばあさんが、土をかぶされて、眼だけを出してキョロ
キョロさせとつたげな。殿様は口をアパーンと開け

が別にちやんと残っているのです。

て帰らつしやつたげな。

この話は、これだけなら平地の人間が山の人の無
知をあざ笑う話にすぎません。しかし、もし、村の
人がこつそり次のような相談をしたのだとしたら、
どうでしょう。

「茶畑をこしらえても、もうけが出るごとなつたら、
殿様が高い運上(税金)かけてくるに決まつちよる」

「そうじゃ。それなら働き損じや。だれか知恵ば出さ
んか」

こうなると、この話は、機略に富んだ山の人にたい
する、平地人の畏敬の念を表す話になります。

昔の篠栗の平地人は、かけがえのない水源の山、
産土神のすみかの山、そしてその山に住む人々をた
えず意識し、うやまつていたはずで、ところが、福
博都市圏が発達するにつれ、人々の眼はそちらには
かり向かつて、山地への畏敬を忘れてしまい、それと
ともに八木山話も差別的な笑い話に墮落していった
のではないかと思われま。その証拠に、目が覚める
ような八木山の人の機略を物語る話も、わずかです

篠栗古文書会 高橋 健吾



篠栗から見た八木山方面